

一八世紀日本の
文化状況と国際環境

笠谷和比古編

思文閣出版

一八世紀は豊穡の世紀である。世界のいづれの地を見ても、内容豊かにして個性に溢れ、そして歴史的にも重要な役割を果たすことになる文化状況が形成されていた。

西欧世界においては、ジェームズ・ワットによる蒸気機関の発明とそれにもなう産業革命が進み、近代資本主義システムが勃興しつつあった。政治哲学の分野では、自然法理論と啓蒙主義哲学の盛行が市民革命と近代市民社会の形成を惹起していた。音楽芸術の分野においても、教会音楽であり貴族層の娯乐的芸術でもあったバロック、ロココの古典的音楽はベートーヴェンによって集大成されるとともに、近代市民社会の音楽として確立されていった。このように一八世紀は西欧社会では近代市民社会形成の胎動期にあたっており、その文化的動向に対しては多方面から研究が行われてきた。

東アジアにおいても一八世紀は、やはり豊かな稔りに満ちた時代であった。中国では清朝の体制は安定し、康熙・雍正・乾隆の三大皇帝による安定的治世と、一連の国家的規模でなされた典籍編纂事業、地誌編纂事業とおして文運は隆盛をさわめていた。李氏朝鮮においても朱子学が全盛時代を迎えており、ことに中国が満洲族による支配を受けていたことから、李氏朝鮮は自ら中華文明の正統な後継者をもって任じ、朱子学を基軸とする儒家文化が同国の両班官僚層たちによって最も純粹な形で展開されていた。

そして日本もまた、すでに百年を経過しつつあった持統的平和の中で、この一八世紀という時代は、社会のさ

さまざまな場面において独自性に充ち満ちた文化的発展を見せていた。社会経済活動の分野では、大坂を中心とする全国的な経済ネットワークが形成され、全国規模での商品生産・流通が展開されるとともに、中央市場である大坂では世界に先駆ける形で、証券市場、先物取引のシステムが形成され、経済活動の飛躍的な発展をもたらしていた。

政治の分野では公共性理念をめぐる政治思想の面において顕著な進化が見られ、一方では行政的統治システムの精緻な構築、他方では「国家・人民のための君主」という国王機関説的な政治理論の普及、という世界のトップレベルを行く思想的内容を示しつつあった。学問の分野では、儒者の荻生徂徠が古文辞学を唱えて朱子学批判を行うとともに文献学の実証主義の方法論を確立することによって、それ以降の学術的諸分野における近代的・科学的な思维の成長の基礎を形成した。

また徳川吉宗の享保改革において推進された一連の国家的プロジェクト——薬種国産化政策、全国物産総合調査、全国的人口調査、等々——は、一方では物産開発のための実用的な経済学を、他方では自然に対する観察力を精緻化する博物学の発達をうながしていたが、それらの活動はそれまでの幕府・諸藩という封建的分立割拠の状態を超えた日本列島全体を対象とする事業として展開されたが故に、それは政治形態としての統一の国民国家を志向するものとなっている。

この他にも文学・芸術の分野、文楽・歌舞伎といった舞台芸術の分野などまで含めて、日本の一八世紀は豪華絢爛たる文化的内容を誇っている。そしてそれは当然にも、次の世紀の明治維新から始まる本格的近代化にとつて、それが成功裡に発展していくための基礎的諸条件を形成していたということができようであろう。

日本のこのような一八世紀の文化的状況はいかにして形成されたか、それらは東アジア世界、また西洋世界までふくめたグローバルな環境の下で、どのような影響を受けつつ、あるいはまた独自の創造性を発揮しつつ、さ

さまざまな様相を呈していたか。そして欧米世界以外では、なぜ日本だけが一九世紀のうちに独自に近代化を達成することに成功したのか。

本書はこれらの問題意識の下、専門各分野の研究者を集め三か年にわたって運営された国際日本文化研究センター（日文研）における共同研究会の成果報告論集である。

共同研究会の概要については巻末の一覧に示したとおりであるが、いずれの報告も充実した内容を備えており、討論は白熱を帯びて止むことがなかった。そのような中であつてただ残念であつたのは、この共同研究会における主要なメンバーであり、編者の長年にわたる知己であつたヘルベルト・プルチヨウ先生を急性の病で喪つてしまったことである。先生は一八世紀日本の新たな状況を啓蒙の概念で捉えるべきことを提唱され、また「日本人による日本の発見」がこの世紀における最も重要な文化的事象であることを指摘されていた。もとよりそれらの問題は、今回の共同研究会の核心的な課題をなしており、この共同研究会における先生の役割はこのうえなく重要であつた。

このような先生を喪つた悲しみは深く覆いがたいものがあるけれども致し方のないことでもある。いまはまだ、共同研究会の成果である本書を先生の霊前に捧げてその御冥福をお祈りするばかりである。

二〇一一年五月一〇日

編者

まえがき——一八世紀日本をめぐる研究課題とその意義——

序論 一八世紀日本の「知」的革命 Intellectual Revolution……………笠谷和比古 3

I 思潮

江戸中期における擬古主義の流行に関する臆見……………宮崎修多 33

太宰春臺における古文の「體」「法」重視……………竹村英二 59

——古文辞「習熟」論に鑑みて——

一八世紀日本の新思潮——国学と蘭学の成立……………前田 勉 81

蘭方医が受容した一八世紀の西洋医療……………クレインス、フレデリック 103
✓

——治療法の根拠と理論展開——

昌益とシエリング——その自然と医の思想……………松山壽一 121

享保期における改暦の試みと西洋天文学の導入……………和田光俊 149

漢訳西洋曆算書と『天学雜録』……………小林龍彦 173

——精円軌道論と物体の落下法則の受容をめぐる——

II 経済と社会

一八世紀新興問屋商人の広域的活動とネットワーク……………長谷川成一 193

——津軽領・足羽次郎三郎の活躍——

東北日本における家の歴史人口学的分析……………平井晶子 215

——一八・一九世紀の人口変動に着目して——

江戸書物問屋の仲間株について——出版界の秩序化……………藤實久美子 233

江戸時代の日本人は日本をどう発見したか……………プルチョウ、ヘルベルト 253

III 文化の諸相

熊沢蕃山の楽思想と一八世紀への影響……………武内恵美子 267

一八世紀のいけ花——「たて花」「立花」「抛入」の関連を通して……………小林善帆 297

大嘗会再興と庶民の意識……………森田登代子 327

一八世紀における武術文化の再編成——社会的背景とその影響……………魚住孝至 367

享保期の異国船対策と長州藩における大砲技術の継承……………郡司 健 393

——江戸中期の大砲技術の展開——

IV 国際交流

歌舞伎と琉球・中国……………	武井協三	419
琉球の中国貿易と輸入品——海を越えた唐紙——……………	真栄平房昭	439
一八世紀朝鮮国の儒学界とそれがみた日本の儒学……………	平木 實	457
ソウルに伝えられた江戸文人の詩文——東アジア学芸共和国への助走——……………	高橋博巳	491
一八世紀～一九世紀初頭における露・英の接近と近世日本の変容……………	岩下哲典	511
引き継がれた外交儀礼——朝鮮通信使から米国総領事へ——……………	佐野真由子	535

共同研究会開催一覧

執筆者紹介

序論 一八世紀日本の「知」的革命 Intellectual Revolution

笠谷和比古

はじめに

日本の一八世紀社会は、その各種分野において豊潤な果実を生み出しつつあった。ことに学術や新しい「知」の動向に見るべきものが少なくなかった。

儒学の分野では、東アジアの主流学説であった朱子学を圧倒する勢いをもって、古典儒教への回帰を主張する古学が台頭し、山鹿素行、伊藤仁斎を経て荻生徂徠の登場をもって一世を風靡するにいたる。これら儒学の古代回帰の動向に刺激される形で、日本古代の神ながらの道を究明することを目的とした国学もまた隆盛を迎える。

このように古の聖人の道や、神々の道を探究する宗教道德的な学問が盛んになる一方、他方では、もつと現世・現実に即した実用を旨とする学問も発達した。葉の開發を目指す本草学、より広く日本国内の有用物を探査して産業化しようとする物産学・経済学が誕生するとともに、自然をあるがままに捉え、そこに棲む動植物や魚貝類を精密に描写し記述していく自然誌ナチュラルヒストリーとしての博物学、そしてヨーロッパの学術的成果を直接に導入する蘭学が勃興することとなる。

これら一八世紀の日本社会に継起的に登場する諸学問や「知」のあり方は、当然にも徳川時代の日本人と日本社会の文明的な発展をもたらし、日本の近代化にとって少なからぬ役割を果たしたであろうことが推測される。実際、一八世紀の時代におけるこのような「知」の前進と広範な分野にわたる展開が見られなかったとしたら、明治期以降の日本の近代化は果たして実現していたかについて深い疑義を抱かざるをえないのである。

その意味において一八世紀の日本社会の中で生起し、展開していた「知」の新しい動向の意義は重要であろう。そしてそれは、「知」の革命と呼んでも決して過言ではないような意義を有していたように思われる。

それでは、これらの「知」的営為はどのようにして生起し、そしてどのような論理をもって相互に結びつきながら発展し、「知」の革命と呼ぶにふさわしいような豊穡な果実を生み出していったのか、その動向を跡づけてみたい。

一 儒学の新動向と実証主義的分析法の形成

一八世紀日本の新しい「知」の動向を考えようとするとき、まずもって検討されなければならないのが儒学の世界の動向であり、東アジア世界の主流学説であった朱子学に対して、日本で湧き起こった古典儒学への復帰を唱える古学派の思想内容であろう。一七世紀半ばにおける山鹿素行に始まり、伊藤仁斎によって発展せしめられ、そして荻生徂徠において完成を見る知的動向である¹⁾。

この古学派儒学、ことに荻生徂徠によって古文辞学として方法的に確立される徂徠学の重要性については、数多くの先学たちによって指摘されているところであるが、ここでもこの徂徠学の問題から検討をはじめることとしたい。

徂徠は朱子学者として出発したが、朱子学の観念的性格、主観的内省に問題を帰してしまふ態度に疑問を覚え、

儒学の本来は礼楽刑政の具体的な制度を明らかにして、経世済民の実をあげることにあるはずであるとされた。

もとより経世済民を標榜することは朱子学として同様であるが、それを為政者の道徳的陶冶によっておのずから実現されていくとする朱子学の立場に対して、徂徠学のアプローチは古代の聖人が定めた礼楽刑政の理想的な制度を解明把握し、これを社会に施行することによって治国・安民を実現していくとするところにその独自性があつた。⁽²⁾

後述する八代將軍の徳川吉宗も徂徠に関心を示し、しばしば召出してその意見を求めた。徂徠の政治上の献策は、彼の晩年の著述である『政談』⁽³⁾の中に集約されている。徂徠の献策の内容は多分に復古調のもので、社会の現状を受け入れつつ改革を構想する吉宗の施策には必ずしも反映されるものではなかったが、徂徠学の基本をなす制度主義的な統治構想は吉宗の考えとよく合致し、吉宗の政治のあり方に大きな影響を及ぼしている。

徂徠学の近代思想形成過程における意義を、その思想内容ではなく、思惟様式の中に求めるべきであるとしたのは、周知の丸山真男の議論である。⁽⁴⁾すなわち丸山は、徂徠の立論体系をもって、朱子学的な天地宇宙から個人の内面道徳までを統一的に捉えようとする「連続的思惟」を否定するものとして、また朱子学の自然の理法に基づく秩序観に対して政治行為における「作為」の論理を対置させることによって、個人道徳とは次元を異にする「政治の領域の独自性」を明確化したものとして位置づけた。

このような丸山の著名なシエーマをめぐっては、そもそも朱子学的儒学が支配的イデオロギーとして徳川社会に広く浸透していたとする丸山的前提に疑義ありとする批判論⁽⁵⁾など、賛否の論が長きにわたって繰り広げられてきたことも人のよく知るところであるが、ここでは徂徠学の歴史的意義について、いま少し別の観点から検討してみたい。

すなわち、徂徠が自己の学的構想の正しさと古代中国の聖人、先王の立てた礼楽刑政の道を明らかにするため

日文研共同研究「一八世紀日本の文化状況と国際環境」◆共同研究会開催一覽

研究代表 笠谷和比古
研究幹事 F・クレインス

〔二〇〇七年〕

第一回

四月六日(金)

一八世紀日本をめぐる研究課題とその意義

— 共同研究会の趣旨説明 —

共同研究会運営方針の検討 I

四月七日(土)

共同研究会運営方針の検討 II

本年度共同研究会の年間プログラムの作成

第二回

六月二二日(金)

天明期の通詞蘭学

現代日本人にひそむ一八世紀の身体

六月二三日(土)

近世中期住友家の経営

一八世紀後半の旅日記は我々に何を教えてくれるか

第三回

八月二五日(土)

科学と形而上学の合体と離反

— ニュートン力学の場合 —

一八世紀朝鮮の実学の概念について

一八世紀の法文化

— 法化社会の到来(先例から判例集・法典へ) —

第四回

一〇月二六日(金)

幕府天文方と陰陽道

一八世紀日本における Modern mind(近代的意識)

の発動

世界自然遺産・白神(しらかみ)山地の一八世紀

一〇月二七日(土)

一八世紀日本における民衆教育と読書

一八世紀の天皇即位と大嘗会

一八世紀フランス・日本の文化相対主義

— 比較思想の観点か —

第五回

一二月七日(金)

一八世紀の天皇即位と大嘗会

江戸後期における徂徠学の影響

林 淳

芳賀 徹

長谷川成一

横田 冬彦

森田登代子

上垣外憲一

森田登代子

平石直昭

二月八日(土)

一八世紀日本の武道

魚住孝至

一八世紀の琉球と中国

真栄平房昭

一八世紀の海外情報と蘭学者

岩下哲典

(二〇〇八年)

第六回

二月八日(土)

近世日本における雅楽と楽の展開

武内惠美子

一八世紀日本の読書空間

前田 勉

一八世紀日本における天文学

和田光俊

第七回

四月二十六日(土)

一八世紀における西洋の医学と日本の医学

F・クレインス

近世日本の海外情報と琉球

真栄平房昭

安藤昌益とシェリング

松山壽一

—「医」の思想をめぐって—

第八回

六月二十七日(金)

一八世紀のいけばな

小林善帆

—『雨中の伽』を中心に—

江戸幕府の武芸奨励と昇進制度

横山輝樹

—徳川吉宗の事例をめぐって—

六月二十八日(土)

蕪村と秋成—新しい感受性の生成—

芳賀 徹

初期の歌舞伎と沖繩の組踊り

武井協三

メディア世界の秩序化と逸脱

藤實久美子

—その一 享保の書籍統制令とその影響—

第九回

八月二十二日(金)

忠臣蔵におけるホモ・ソーシャル

佐伯順子

—その近代への継承—

一八世紀における新興商人の活動の軌跡

長谷川成一

—津軽領・足羽次郎三郎の活躍と凋落—

八月二十三日(土)

徂徠の『政談』と『太平策』

平石直昭

富士講と吉宗院

上垣外憲一

歌舞伎衣装における海外情報の受容

森田登代子

—小忌衣・馬兼付四天・厚司にみる—

第一〇回

一〇月二十四日(金)

一八世紀朝鮮の儒者がみた日本の儒学 平木 實

—朝鮮時代の儒学を理解する一環として—

一八世紀日本の裁判 谷口 昭

—法化社会の熟成—

一〇月二十五日(土)

日本における西洋天文学の受容

和田光俊

本多利明の経済思想

宮田 純

古川古松軒と啓蒙

H・プルチョウ

第一一回

二月五日(金)

国学と蘭学の成立

前田 勉

木村兼葭堂とその時代

脇田 修

二月六日(土)

近世日本漢詩史の十八世紀

宮崎 修多

—擬古詩再考—

米国使節江戸出府論争と朝鮮通信使

佐野真由子

—筒井政憲の場合—

(二〇〇九年)

第一二回

二月二十七日(金)

比較史的視点からみた日本の農村家族

平井晶子

享保く明和頃の文学的状况

宮崎 修多

二月二十八日(土)

江戸が受容した西洋

高橋 博巳

—江漢のコーヒートミルと山陽のワイングラス—

一八世紀の琉球貿易

真栄平房昭

森幸安の地図作製活動

辻垣晃一

—享保から宝暦にかけて—

第一三回

四月三日(金)

一八世紀の藩政改革と昇進制度

笠谷和比古

—身分主義と能力主義の相剋—

江戸初期・中期における長州藩の大砲技術

四月四日(土)

一八世紀日本における武芸と武士道

魚住孝至

第一四回

六月十九日(金)

曹寅「日本灯詞」について

唐 権

—一八世紀における西洋生理学の受容—

六月二十日(土)

近世日本数学史

F・クレインス

泉屋住友の経営

小林龍彦

書籍統制と本屋仲間

脇田 修

—仲間の自立的側面—

藤實久美子

第一五回

八月二十日(木)

元禄享保期における(死)の問題(遺言)と書物知

横田冬彦

—一八世紀紀行に描かれているアイヌ民俗—

異民俗描写に見られる啓蒙—

H・ブルチョウ

日本の家印・屋号について

金ボンス

八月二十一日(金)

—新潟県村上市小俣村落の事例を中心に—

近松の作品に見られる「対異国」

原 道生

名所絵と景観保全

長谷川成一

— 一八世紀出羽国象潟 —

第一六回

一〇月一六日(金)

楽の思想と雅楽の動向に関する考察

武内惠美子

一八世紀における法社会の諸相

谷口 昭

一〇月一七日(土)

一八世紀朝鮮における「虎」害の状況とその対策

平木 實

男色と一八世紀の日本

佐伯 順子

近世日本における西洋的国際慣習の受容

— 白旗をめぐる諸問題 —

岩下 哲典

第一七回

一二月四日(金)

一八世紀における大嘗会

訓読と翻訳

森田登代子
竹村英二

— 太宰春台『倭読要領』を中心に —

一二月五日(土)

国学と蘭学の関係

前田 勉

近世の中国、朝鮮、日本における天文と暦

和田光俊

杉田玄白とその周辺

芳賀 徹

第一八回 — 合宿 —

三月七日(日)午後二時～同八日(月)午後五時

開催場所…兵庫県豊岡市、城崎・東山荘

現地調査…三月八日午後(出石城、仙石屋敷ほか)

じゅうほっせいきにほん ぶんかじょうきょう こくさいかんきょう
一八世紀日本の文化状況と国際環境

2011(平成23)年8月1日発行

定価：本体8,500円(税別)

編者 笠谷和比古

発行者 田中周二

発行所 株式会社 思文閣出版

〒605-0089 京都市東山区元町355

電話 075-751-1781 (代表)

印刷 亜細亜印刷株式会社
製本

© Printed in Japan ISBN978-4-7842-1580-5 C3021